

平成30年10月29日(月)

喜多方高等学校創立100周年記念式典

福島県高等学校長協会長・祝辞

平成30年10月20日(土) 13時00分

喜多方プラザ

福島県高等学校長協会会長を務めております磐城高等学校長の阿部武彦でございます。県高等学校長協会96人の校長に代わりまして、お祝いの言葉を申し述べます。

福島県立喜多方高等学校の創立100周年を心からお祝い申し上げます。

また、本日、感謝状・表彰状を受賞された皆様に、重ねてお祝い申し上げます。

さて、本校の前身となりました福島県立喜多方中学校創立は大正7(1918)年に遡ります。一口に100年前と言いますが、日本が長寿社会になっていると言っても、高校生の皆さんから見れば四世代前の曾祖父・曾祖母の時代ですから、長い時の積み重ねに違いありません。

因みに、大正7年(1918)は、ドイツの休戦協定により第1次世界大戦が終結した年であり、日本において、世界大戦中に輸出激増に伴い物価、特に米価が高騰して、富山県の漁民・主婦などが米の移出禁止と安売りを求めて行動に出て米騒動が起きました。新聞の報道などにより、騒動は全国に急速に広がり、警察だけでなく軍隊が出動して鎮圧にあたったとされております。

大正時代から昭和の初期にかけて「大正デモクラシー」と呼ばれる、かなり自由で明るさのある時代があったことをご存知でしょうか。大正デモクラシーの時代を象徴する政治的なできごとが「護憲運動(ごけんうんどう)」です。当時はまだ議院内閣制のシステムは採用されていません。内閣総理大臣は元老(明治維新に功のあった9人の人たちが)天皇の名のもとに指名していたのです。つまり、古い薩摩藩、長州藩といった出身県による優遇措置や、軍隊出身者が政治の中心になる状況を打破すること(「閥族打破」がスローガン)でありました。明治維新以降の政府は、長州藩(山口県)と薩摩藩(鹿児島県)を中心とする勢力が、江戸幕府を倒してできた政権です。このような藩出身者のつながりで政治や軍隊の中枢をコントロールしている状態を「閥族」、それをなくせという運動が「閥族打破」だったのでした。

この動きは政党による政治、そして普通選挙を実施すべきであるという運動につながっていくのです。当時の選挙は、一定額以上の納税をしているお金持ちだけが参加することができる「制限選挙」でした。この「お金による制限」

を撤廃し、だれでも選挙に参加できるようにした選挙のことを「普通選挙」と呼びます。

大正デモクラシーのもとでは、この普通選挙を目指す動きも大きなエネルギーとなっていくます。1925年に日本初の普通選挙がなされますが、それでも「男子25歳以上」に限定されたものでした。因みに、今、18歳以上の国民に選挙権が付与される時代ですが、その権利を手に入れるための長い民衆の要望があったことを我々は忘れてはいけません。

明治以来、自由民権運動が盛り上がった会津北部の地で、新たな県立中学校の設立を望まれた背景には、このような新たな日本への大きなうねりも関係していたと推察されます。

爾来、百年の月日の中で、喜多方中学校と喜多方高等学校が、2万5千人を超える卒業生を輩出し、長い伝統と精神を形作ってきたと考えます。

高校の校歌の歌詞にはその学校の創立以来の校訓や精神、スピリットが込められていることが多いと考えます。校歌を声高らかに歌うことによってその学校のアイデンティティが高まり、その学校の精神をわがものとするための大きな手立てとなります。

喜多方高校の校歌は、創立の翌年の大正8年に（北村賢端作詞）定められ、以来今日まで歌い継がれておると聞きました。

100周年に当たり、今回改めて喜多方高校の校歌の歌詞を見直してみたところ、その6番に

天地びょうびょう際涯なく時潮の浪は荒くとも
われには金剛の力あり われには不壊の心あり
とあります。時代の荒波を、金剛不壊（ふえ）の精神でもってつながってきた同窓の方々の精神が垣間見えます。

会津の喜び多き郷に 神々しい飯豊の山並みと揺蕩う阿賀川の流れによって育まれてきたこの地の文化と歴史は、これからも喜多方高校の生徒によって受け継がれていくのであります。生徒の皆さん、この校歌をぜひ長く長く歌い継いでいってほしいと思います。

最後になりますが、喜多方高校の生徒の皆さん、校歌に歌われる「俺まずたゆまず」学びの道に勤しんでください。ここ喜多方の地で育まれた皆さんの夢が実現することと、創立100周年、更にその先へ向けた喜多方高等学校の益々の発展をお祈り申し上げ、私のお祝いの言葉といたします。

本日は、学校創立100周年、誠におめでとうございます。